

[本城先生]

ようこそいらっしゃいました。ただ今より平成 25 年度香川大学瀬戸内圏研究センター学術講演会を開催したいと思います。私は司会進行を行います瀬戸内圏研究センター、ゼネラルマネージャーの本城凡夫でございます。どうぞ、よろしく願いいたします。それでは、多田邦尚 瀬戸内圏研究センター長、開会の挨拶をお願いいたします

[多田先生]

皆さんこんにちは。この 4 月から本城先生の後を継いで瀬戸内圏研究センター長に就任しました香川大学農学部が多田です。よろしく願いいたします。今日は当センターの学術講演会にお越しいただきまして、どうもありがとうございます。

当センターも設立 5 年になりました。この研究センターは 3 つの柱、海の環境、歴史・文化・観光、それから地域医療の 3 つの柱を立てて、それぞれのグループで研究を進めてきました。最初にその 3 つのグループの研究内容をごく簡単に紹介します。

海グループは瀬戸内海の里海作り、ノリの色落ち対策、それから安全安心カキ養殖という 3 つのトピックを持っており、瀬戸内海で問題になっているノリの色落ちは無機三態窒素の減少が原因であるということをつまららかにした上で、豊かな生物生産に恵まれた海の実現をめざして研究を進めてきました。特に注目されているのが、ノリの色落ち対策研究ですけれども、これは香川大学、それから香川県、小豆島町、香川県漁連と一緒に国の水産庁からの資金を受けて研究を進めております。その研究成果についてはノリスカート等、新聞、テレビ等、マスコミで報道されているとおります。また、香川大学の瀬戸内圏研究センターの庵治マリーナステーションが中心になって、志度湾のカキの大量斃死対策ということで、カキイカダに貝リングという装置を付けて研究をしています。貝リングは本城先生が開発された装置で、二枚貝の殻の開閉をモニターする特殊なセンサーをカキに付けて、殻の開閉信号を香川大学の研究室に送信して、カキの健康状態をリアルタイムにチェックしています。また同時にカキの餌になる植物プランクトン量をモニターするクロロフィル a センサーを志度湾のカキイカダに係留して、カキの餌の状態を管理しており、地元のカキ養殖業者さんからも非常に強い関心を示していただいています。

2 つ目の歴史・文化・観光グループ。このグループはこれまでずっと離島の過疎化問題を中心に調査研究を行ってきました。その成果として、島の過疎化防止とか島興しに対して、外部からの経済投資というような開発では、島はかえって翻弄され、開発されたシステムがなかなか根付かない。できれば島にある観光資源を島の中で開発して存続させることが望ましいということ。それはすなわち島の生活を尊重して、島の素材を生かして、それを興す人達と島民とが一緒に交流して、経済を発展させていくことが大切であるという提言をまとめています。今年度から、この研究拠点を西の島嶼部に移し、伊吹島等の研究に取り組んでいるところです。そのほか、瀬戸内国際芸術祭に関する島民意識の調査、あるいは四国遍路の世界遺産に向けての学術的な調査や島めぐり、遺跡観光ツアーの発掘なども

行っています。

3 つ目の地域医療グループ。ここでは担当の原先生の努力が実って、県と一体となって推進する香川医療福祉総合特区が国に認められました。今、小豆島の遠隔医療体制が整ってきており、その成果は新聞、テレビ等のメディアでも紹介されているとおりです。この総合特区の今後の展開にはオリーブナースがかかわります。オリーブナースは通信回線を用いて医師の指示を受けながら、離島とか山間部で医療に直接たずさわる、すなわちその場に医師がいなくても治療等ができる高級看護師のことです。このオリーブナース制度の実現には様々なハードルがありましたが、現在 30 数名のオリーブナースが育ってきており、今後、毎年 10 名ぐらいの育成を予定しています。さらに、今年度からは西部島嶼域での遠隔医療の早期実現をめざしています。また、先月は地域医療の国際学会をここサンポートで開催するなど、世界に向けてもこの瀬戸内圏から情報発信をしているところです。

今日はその 3 分野に関連する先生方を講師にお招きして、学術講演会を企画しました。私達、一生懸命勉強しようと思っておりますが、今日お越しいただいた皆様方もこれらの分野への関心を高めていただければ幸いです。簡単ですがセンター長の挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

[本城先生]

多田先生ありがとうございました。それでは早速、講演の方に入りたいと思います。